

あるラグーマンの決断

校長 大谷 慎也

「行く年や 猫うづくまる 膝の上」(夏目漱石) 師走。時の経つのは早いもので今年も残すところわずかとなりました。2学期は、体育祭や合唱コンクール、全校三者面談等の実施におきまして、御多用の中、保護者の皆様、地域の皆様に御来校を賜り、厚く御礼申し上げます。さらに、小学校PTAや育成会におきまして、生徒参加型の様々な事業が実施され、本校の生徒にとりまして目に見える満足感や達成感を味わわせていただいたことに、深く感謝申し上げます。

12月は一年の納めの時期であるとともに、新年を迎える準備の時期でもあります。3学期には、1年生が「未来くるワーク体験」(中学生職場体験)、2年生では、「館岩少年自然の教室」(自然体験)を控え、学年集団での取組が始まっています。また、3年生は、進路選択に向けて、具体的なスケジュールの調整を図っているところです。

さて、今秋開催されたラグビーワールドカップ2019日本大会において、国内外の選手の姿に数々の感動を覚えました。その中でも、3試合連続のトライにより日本チームを決勝トーナメントに導いた福岡 堅樹(ふくおかけんき)選手が再び注目を浴びました。4年前の2015年イングランド大会で、日本代表が第1戦の南アフリカ戦で歴史的な逆転勝利を収め、世界中から絶賛されたことは知られています。しかし、この試合に出場した選手は、相当の疲労を残し、負傷により第2戦に出場できない者も複数いました。このような状況の中、当時筑波大学4年生の福岡選手が先発します。ポジションは、WTB(ウィング・スリークォーター・バック)。エディン・ジョーンズ前ヘッドコーチが「チーターと勝負しても勝てる。」と称賛する、50メートル走5秒8の俊足を生かし、2トライ。世界ランキング9位のスコットランドに敗れはしましたが、プロではない大学生の福岡選手のプレーに人々は感動しました。

福岡選手は、高校・大学でラグビー選手だった父から5歳の時に勧められ、地元のラグビークラブに所属します。中学校時代は、陸上部で走力を高めながらラグビーを続けます。中学卒業後の進路選択においては、医師である祖父の影響で、高校卒業後は大学の医学部に進学する夢を抱いていたそうです。県立福岡高校に進学し、1年生からレギュラーで試合に出場します。しかし、2年生の時に左膝の靭帯を損傷し、3年生の時には右膝の靭帯を断裂します。この時、全国ラグビーフットボール大会福岡県予選が迫っていたので、手術をせずにテーピングをして試合に出場します。見事優勝し、全国大会に駒を進め、花園ラグビー競技場でプレーをします。約3か月間靭帯を傷めたまま、競技し続けたこととなります。大学受験では、筑波大学の医学群を目指しましたが、希望が叶わず浪人生活に入ります。予備校に通いながら、手術した右膝のリハビリを行います。テレビやDVDでラグビーの試合を観ると筑波大学でラグビーをしたいという気持ちが膨らみ、勉強にも動機付けになったとのことです。センター試験後、国立大学の前期試験は筑波大学医学部を志望します。しかし、不合格の場合の後期試験について迷い、悩みます。第一線でプレーすることを諦め、再度挑戦するか。それとも、他の学群を志望し、ラグビーを極めるか。結果は、ラグビーを選択します。医師を目指すのは、ラグビーを引退してからでも遅くはないと決断したのです。両親も引退した時点で医師を目指すのならば、サポートすると応援してくださったとのことです。そして、諦めず、後悔しない道を選んだ結果が、イングランドの地で実を結びました。しかしながら、この大会後福岡選手は、二度目のラグビー選手と医師との選択に迫られます。結果は、二つのうちの一つである夢にさらに挑戦し続ける、すなわち、ラグビー選手として次回のラグビーワールドカップに挑戦するという決断に至ります。その後の4年間の努力の積み重ねが、日本を世界ベスト8に導くという輝かしい功績を残しました。これまで私は生徒の前で、「夢は、逃げません。逃げるのは、いつも私自身です。」と、自戒の念を込めて述べるがありました。年の節目にあたり、改めて目標を見据えて努力を重ねること、凡事徹底の大切さを伝えようと思います。

寒さの増す折ですが、生徒、保護者の皆様、地域の皆様、そして、教職員にとりまして、新しい年が幸多き年となりますことを心よりお祈り申し上げます。